10月5日
感　想

中国人強制連行・安野発電所フィールドワーク

原水爆禁止日本国民会議（原水禁）　谷　雅志

2026年10月5日、天候が心配な中、広島の金子さん・大瀬さんとともに「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」の川原さんにお世話になり、安野発電所をはじめとした中国人強制連行をテーマにしたフィールドワークを行いました。

当時の写真や資料を示しながら説明してくださる川原さんのお話を伺い、実際に安野発電所の水槽まで約50mの山道を上がったことなどによって、当時の中国人強制連行の過酷さを十分に感じられたのか、私の想像力がどこまで高まったのか、自問自答をしながらの時間となりました。「ほったて小屋」で使用された製材は木の皮をしっかり処理されたものではなかったこと、「布団」という名の布切れだけで寒さも厳しい山中での生活を強いられたこと、「まんとう」というこぶし大の食料一つで栄養も足りず空腹で過ごされていたことなどを伺いました。「トロッコ」を使ってトンネル内から石や砂を運び出すときに転倒事故に巻き込まれ、目に砂が入ったまま治療を受けることもできず、他の体調不良者や怪我人などとともに下関から中国に返される途中、目の痛みを我慢できず自身で右目をえぐり取った宋さんのお話は、あまりにつらいものでした。目の痛みに我慢できず失神し、自分で右目をえぐり取ったことで「目の痛みがましになった」というエピソードは想像を絶します。すぐに清潔な水で洗い流すことができていれば、事故現場の近くにあった病院で診察を受けることができていれば、と思ってしまいます。人として扱われることは決してなかった実態の一端を感じました。

中国人同士の統制を強い、大隊長や中隊長、班長といった組織やグループを形成することで監視体制を強化したやり方は、戦争や強制連行の遂行にあたって指示命令系統を徹底し、コントロールする方法でした。「日本人」が「中国人」を直接管理しようとすると、「中国人」はまとまって反抗する危惧があります。その可能性をなくすためには、「自分たち」の中から指示命令する組織体を形成する必要があり、不満の矛先を「日本人」に向けない姑息なやり方だと言わざるを得ません。結果として中国人同士の争いの中で大隊長ら2人が殴り殺される殺人事件が起き、そこから広島市内の刑務所に連行されたことによって被爆した「中国人」を生み出すことになりました。後日、爆心地から30km以上離れた安野発電所付近も「黒い雨」によって被爆地であるとされましたが、強制連行という国家一丸となった不条理極まりない行為によって生み出された被爆者がいた歴史事実を正しく認識する必要があります。

「安野　中国人受難之碑」には、強制連行で連れてこられた360人全員のお名前が記されています。階層管理を強いられた大隊長や中隊長、班長なども全員です。そこにはご遺族のみなさんのおもいが、いかほどであったかを想像させられました。大隊長の遺族の方は今も、日本に来ることはないそうです。

今回のフィールドワークでは、調査や聞き取りによってこの問題を明らかにしてきた「継承する会」はじめ、市民運動のみなさんの力を感じることになりました。安野発電所付近での地元のみなさんに聞き取り調査した際、決して簡単に話してくれたわけではないという川原さんのお話は、戦争が終わってからも人の心の中に残り続けたのだと感じます。証言をすることが、地元での「暮らしに

くさ」につながる可能性を考えた時、「正しい」ことを誰もが「正しく」できるわけでは決してない、戦争は終わってからも人の心を痛めつけるのだと、改めて確認することになりました。

取水口から安野発電所まで続く 7.7km におよぶ導水路は「1 日約 3m」という進度で掘り進められ、2 交代制の 24 時間労働によって開通しました。発電所見学にご協力いただいた中国電力の職員の方が今でも 3 年に一度、その導水路に入り点検をされるそうです。まったく日の光が及ばない導水路の中は、点検に入るだけでも相当な恐怖と不安をひきたてられると伺いました。

民主的であることが戦争を遂行させない、強制を許さないことが戦争を許さない、人権を大切にすることが最も戦争を遠ざけるという事実を、私たちは歴史から学び、同じ過ちを二度と繰り返さないために行動しなければなりません。歴史事実を歪曲することで過去を正当化し、過ちを小さく見せることなどできません。正しく歴史の事実を学ぶことは、これから先の平和を考える上での入口になると考えます。

毎年夏の原水禁世界大会フィールドワークで川原さんたちにお世話になりながら、これまで私自身が参加することができなかった安野発電所を中心としたフィールドワークに今回訪れることができ、今後の原水禁運動の推進力になるエネルギーをいただいた気がします。これからも私自身が学び続けることが、未来を考えることにつながることをしっかり認識し、歴史の事実と向き合っていきたいと思います。